

特選  
2011  
日本銀行  
総裁賞

「金融と経済の明日」第9回高校生小論文コンクール

## 経済を活性化させる信頼もコストのうち

東京都・桜蔭高等学校 2年 岩間 優

「今年の夏は、節電!」がわが家のただ今のスローガンになっている。これまでの夏なら、すぐさまエアコンにスイッチを入れる暑い日でも、なんとか暑さをしのげるときには、扇風機だけで我慢だ。原発事故によって、節電はこれまで以上に真剣に取り組まなければならないからだ。おかげで私は新陳代謝がすっかりよくなってきたせいか、これまで悩みの種だった体形も少しすっきりとしてきた。

仕事をしている母は家庭でも「常にコスト意識を持って」と私に要求してくる。コストパフォーマンスはなにも仕事上のことだけでなく、家庭内でも重要事項だというのだ。例えば、以前に受験した英語の検定試験でも、一割の失点があった結果に、母は受験料の一割を私の小遣いからしっかりと差し引いた。痛みを感じてこそ、初めてコスト意識が持てるというのは、悔しいけれどかなり納得できた。

私がよく行くファストフードの店では、スマイル0円と表示されているが、実はこの笑顔こそ一番コストがかかっているのではないかとあるとき私は考えた。例えば、私が入前でニコニコしていられるときは、おいしいものを食べて、ヘアスタイルも思うように決まっっていて、気持ちがいいときだ。そのためには前準備の時間も必要だし、それなりにヘアスタイリング剤などを買ってお金をかけることもある。そして、もし、そんな私を雇ってくれるとなれば、私の人件費だってかかってくるのだ。さらに想像すれば、私が店頭で無愛想にしていたら、お客さんに逃げられて、店の売り上げを落とすことになるかもしれない。そうなると、私の人件費に対して、売り上げが落ちて、店のコストパフォーマンスはぐっと下がる。父が単身赴任をしている中国に私が訪れたときのことだ。現地の店員さんは、日本流のサービス精神を持ち合わせていないことにまず驚いた。買い物をして、レストランで食事をして、なぜか皆ぶっきらぼうなのだ。私が何か気に障ることでもしたのかと、こちらが気にかかってしまうくらいだった。でも、それは文化の違いだけのことだということを、数日もすれば気がついた。この体験を通して、

日本の強みは、行き届いた配慮あるサービスの提供とそれにとまなう信頼にあるのだとあらためて感じた。それは、日本人の心根にある相手を思いやる心が礎になっている行為だ。宮澤章二の『行為の意味』の詩にもあるように、「あたたかい心が あたたかい行為になり やさしい思いが やさしい行為になるとき〈心〉も〈思い〉も 初めて美しく生きるのだ」ということを再確認した。

日本のサービスや製造技術には、その根底には、顧客への思いが込められていることがより信頼できるサービスや商品を作り上げる糧となっているのだと私は信じている。

私は将来、医療に携わりたいと考えているが、医療分野でも患者に対してレベルの高い医療をいち早く提供することは最も重要だ。がんや認知症などの難治疾患に対する画期的な医療の進展は、多くの患者が切望している。昨年、「新成長戦略」で閣議決定され、医療は重要な戦略分野に位置づけられた。「社会保障と税の一体改革案」にも、医療イノベーションの推進は盛り込まれている。日本は基礎医学研究分野で世界の最先端を維持しているという。今後も先端医療技術が開発されていくなかで、一番先に考えなければならないのは、患者が受ける最先端医療に対する不安の解消だ。そこには、いつも利益と不利益があるということを中心にとどめていたいと思う。原子力発電の安全神話もそうだが、先端的なものに対して冷静にその結果を判断することを怠ってしまうとしたら、不測の事態の際に大きな被害を受けることになることを私たちは思い知った。有効な治療がなかった病気の治療が可能になっても、有害な事象が起きてしまったりは取り返しがつかない。だからと言って、医療の不確実性を疑ってばかりでは、前へ進めない。新しい医療を求める人に理解が得られるような情報の提供や環境づくりが必要だ。先端の医療技術を追うばかりに、人の心に寄り添う思いを置き去りにしてしまったり、本末転倒なことになってしまうと私は危惧する。だからこそ、私は患者側、医療側の両方にとって最善のやり方を考えられるひとりに将来なりたい。医療での信頼は患者が支払う医療費にも含まれている一番要になるものだと私は思うからだ。

私たち日本人は東日本大震災のときも冷静で秩序ある行動ができる国民性を持っていることを再認識した。これは世界中が認め、称賛した。パニックになって、ひとりよがりになることなく、互いに助け合う光景は街のあちらこちらで見られた。

しかしながら、福島第一原発事故の情報は、政府が国民のパニックを引き起こすことを嫌って、当初正しい情報が迅速に流されなかった。そのことがかえって国民の不安感を招く結果となってしまったように思える。正しい情報を得て、納得のいく最善の選択を自らができる環境が整えられていることが重要なのだと思い知った。そしてまた、情報の多様化時代にあって、私たち自身がひとりひとり正しい判断力を備える習慣を心がけていかなければいけないとも思った。

すべての産業は、需要と供給の関係で成り立っているが、そこには、信頼という関係があつてこそそのものだ。确实であることは大前提だが、予測できない不幸な出来事があつたときに、その信頼を失うことがないように真摯に取り組むことがさらなる信頼関係を生む。日本ブランドの商品やサービスは、その誠実さが込められていることを、これからももっと世界にアピールしていくことが必要だ。近江商人の経営理念に由来する『三方よし』は、売り手と買い手だけでなく、その取引が社会全体を幸福にするという理念に基づいて、売り手よし、買い手よし、世間よしという意味だ。地元だけを活動の場とせず、何の縁もゆかりもない人々から信頼を得ることが肝心だったが故に、近江商人たちの心得とされていたのだ。日本経済の現況は、様々な問題を抱えているが、先人たちが築き上げてきた日の丸印の信頼を失うことなく受け継いでいきたいと私は思う。次世代を担う私たちが、また次の世代へと信頼のバトンを渡さなくてはならない。

日本を震撼させた大震災を経験して、日本経済は苦境に立たされた。しかし、日本人に対する世界からの信頼は失われていない。日本経済は必ず再生する。世界がそう信じている。近江商人のように、取り組むべきことに懸命になりながら、結果的に社会に貢献できる信頼の経済を目指していくことがさらなる活力となる。これまでとは違う新しく生まれ変わった日本経済を私たち世代で活性化させていきたいと思う。その思いを私は強くした。

<参考文献>

- ・宮澤章二『行為の意味 青春前期のきみたちに』ごま書房新社、2010年

